

後鳥羽院の御文學

小島，吉雄

<https://doi.org/10.15017/2556634>

出版情報：文學研究. 25, pp.127-148, 1939-06-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：



後鳥羽院の御文學

小 島 吉 雄

本年は丁度後鳥羽院登遐後七百年に相當するので、わたくしは、此の機會に於てその御文學を通じて御聖德を偲び奉らうと思ふ。

後鳥羽院が英邁の君でいらせられたことは、今更こゝに、改めて申述べるまでもないことであるが、その深く廣く渡らせられた御趣味の中に、和歌連歌の道も數へられ、而も院はその方面に特に御堪能でましたことは、われゝ文學に携はるものにとつて、まことに有難いことの極みである。

後鳥羽院の御作歌生活は、いつ頃からはじまつてゐるか、正確な日時は分らないけれども、院の御歌歴を伺ひ奉るに、わたくしの知り得る範圍では、正治二年七月の御歌合歌が御製の最初であるから、従つて、院の御作歌は、御讓位以後にはじまり、それも御讓位の御慌しい御氣分の漸く落着き給ひ御心のゆとりを得ました正治年代に入つてからのことゝ推定申上げて大過なからうと考へられる。どういふ機縁で歌の道に入らせ給うたか、これまた不明なのであるが、作歌は當時の宮廷生活の日常には必ず隨伴してゐるものであつたし、また、上皇の傳相源通親も和歌愛好家であつたから、その方から御勧め申し上げたといふやうなこともあつたであらう。正治院初度百首歌を當時の有

力歌人から召させ給ふ御企てが既に同年の七月中旬からあつたのであるが、明月記によれば、その韓旋を通親がしてゐると考へられるから、右のやうな臆測も可能となるのである。

さて、後鳥羽院御集を拜見すると、此の正治二年七月には、十八日に御歌合が行はれてゐる他に、日附は不明であるが、北面歌合も催されてをり、且つ又、明月記の記事によると、百首歌募集の御計畫も進められてゐる。八月朔には新宮御歌合、續いてその下旬には院初度百首歌の御製作、九月には、再度の百首歌の他に十首歌を諸家から召されたり歌合を相續いて催さしめ給うたりしてゐる。十月には十一日に新宮御歌合を催さしめ給ひ、翌十二日には通親邸影供歌合に臨幸、藤原俊成の判の詞を聞き召してゐる。十一月にも七日に新宮御歌合を、八日には通親邸の歌會に臨幸、御遊ばしてゐる。廿二日には御製の百首歌を御披露遊ばしてゐる。かくて、建仁元久年間にかけて、上皇の御生涯中最も和歌に御熱心だつた時代が續くのである。正治二年と言へば、紀元千八百六十年、西暦では丁度千二百年に相當り、後鳥羽上皇寶算御二十一歳にあらせられる。

一體、此の正治二年八月撰進の院初度百首歌は、上皇の御歌歴に於ても、また當時の歌壇にとつても、劃期的な催しであつて、和歌史的に見ても亦極めて重大な意義を有するものであつた。わたくしは、嘗て文學研究第五輯の拙稿「新古今集の撰集態度と撰集事業」に於て申述べておいたやうに、新古今集の撰集を生むべき氣運は此の正治院百首にその端を發してゐると信じてゐるのであるが、特に注意すべきは、此の百首歌を機縁として、後鳥羽院中心の歌壇が形勢せられるやうになつたことである。

周知の如く、明月記の記事によれば、藤原定家や藤原家隆は最初の豫定では此の百首歌の作者の中に入れられてゐ

なかつたのであるが、藤原俊成の假名奏狀によつて、勅命を以て作者中に召し加へられたのである。定家等を作者中に加へまいとしたのは源通親である。通親をしてさういふ方針を堅持せしめたのは、藤原季經一派の献策であつた。當時の歌壇は二大勢力に分れてゐた。六條藤原家系と御子左家系とである。季經は六條藤原家の一人である。定家は御子左家の嫡流である。藤原俊成は已に當時にあつては歌界の第一人者として我れ人ともに推服するところとなつてゐた。しかし、その子の定家や弟子の家隆等は一部の人々には、その歌才が認められてゐたであらうが、一般的名聲は未だしかつたのである。六條家の季經等は、その歌才はそれ程でもなかつたが、父祖代々の門閥の故を以て名家と目されてゐる。明月記の記事によると、實力なくしてのさばつてゐる此の連中を定家は不快に思つてゐる。正治二年四月六日の條に、定家が季經の判者たる歌合に歌を出すのを不快なりとして辭退したら、季經の方では生意氣だといふわけで定家に對して憤慨してゐるといふことが出てゐる。定家と季經とは、かやうにして仲が悪いのである。九條兼實は、初め清輔に歌を學んでゐたが、その薨後、俊成に師弟の禮を執つた。さういふ關係上、九條家の歌會には、六條家の歌人も御子左家の歌人も出席する。しかし、兼實の息良經を中心とする歌會には、漸次、六條派の影が薄くなり、定家等の勢力が伸張して来る。これは、一つには俊成の勢力が定家等の後楯となつてゐるのと、も一つは定家等の實力が優秀であつたのによるのであるが、九條家歌會で壓迫せられた六條派歌人は、源通親をたよつてその政治的庇護を求めた。そこで、この正治百首に際しては、定家個人に對する反感と、流派に對する對抗心とで、季經一派の定家等排斥運動が現れたらしいのである。しかし、前述したやうに、俊成の奏狀によつて、季經等の希望に反して、定家等が加へられた。而も、その奉獻した百首歌が大いに敬慮にかなひ、即日院御所へ昇殿を聽された。つま

り、これを機縁として、定家たちは院御所の歌會に常連として召し出されることゝなつたのである。そして、後鳥羽院御中心の歌壇が形勢せられるや、その有力な一員となつたのである。ところが、後鳥羽院の御發企で、建仁元年六月千五百番歌合百首を諸家から徴せられた。これは當時の歌界總動員の盛事であつた。そして、此の時、定家等の歌に佳作が多く、またその判詞にもすぐれた批判鑑賞が見られたので、それらの點が院の御意に召して、こゝに同年十一月和歌所が設立せられ、寄人の選任には季經一派は全然その中に加へられなかつたのである。季經等は言はゞ舊派である。定家等は現代式に言へば、新興派である。千五百番歌合は新興派の勝利に歸し、和歌所寄人は殆ど新興派系歌人によつて、占められたといふことになるのである。

新興派歌人は建久初年から九條良經を中心にして一つの集團を形勢してゐた。もちろん、これは大半が俊成系歌人である。此の俊成系新興歌人は正治百首によつて後鳥羽院にその力量を認められた。後鳥羽院はその御好みに従はせ給うて、俊成系新興歌人を以て、院御中心の歌壇を組織し給うたのである。新興歌人群をリードするものは、藤原良經と藤原定家とであつた。此の二人にリードせられた新興勢力が後鳥羽院の周圍にあつまる新進歌人達にはたらきかけて、新しい時代風潮が醸成せられて行つた。所謂新古今歌風の時代が即ちそれである。

新古今集撰進の勅命は、建仁元年十一月三日に下り、和歌所寄人中の六人の者に古今の秀歌を選進すべしと仰せ出され、愈々新古今和歌集編纂の事業が始まつたのである。

「新古今和歌集の撰集態度と撰集事業」といふ一文中に申述べた如く、新古今集は後鳥羽院の御親撰である。文字どほりの御親撰である。材料は各五人の選者から奉らしめられたが、その材料を上皇御親ら選び分け給ひ、そのお選び

になつた歌を再び和歌所へお下げ渡しになつて所謂部類を勅命せられたのである。御選歌時代の御熱心なる御様子については家長日記にくはしく述べられてゐる。萬機のまつりごとをもさしおかせられて此の事にもみ御没頭遊ばしたのである。

さて、部類に於ても、その根本方針は上皇の思召しによつてをり、撰者たちは唯その思召しを體し事務的な仕事にたづさはるのみであつた。こまかしい考勘のこと、譬へば作者名の間違ひとか、題詞の不統一とかいふ場合にこれを訂正することは、撰者の權限に屬してゐたのであるが、部類上の方針とか歌の配列順序とか相似た歌のあつた場合に何れを採り何れを棄つるかといふやうな大切なことは一一上皇の勅裁を仰いだのである。元久二年三月六日に新古今の大體の形が出来上つたが、更に精撰を期するために、刪訂が加へられた。謂ふ所の切繼がそれである。切繼には一、體裁上の整頓、二、歌の精撰、の二義がある。そして、切繼の内容には、一、上皇の勅慮によるもの、二、藤原良經の要求によるもの、三、撰者の意見によるものゝ三種があり、良經の要求によるものはその數少く、明月記によれば三例しかなく、そのうち一例は後鳥羽上皇との御合議によるものであつた。撰者の意見によるものは、矢張り集の體裁に關するもので、部類事業の延長の性質のものであつた。切繼の大半は後鳥羽院の勅慮によるもので、歌の取捨と歌の順序の變更が主たるものであつた。新古今集の序文に強調してゐるやうに、上皇の親撰といふことは古來稀有のことであつて、後鳥羽院の和歌に對する御熱心のほどもこれを以て拜察出来るのである。五人の撰者は全く此の親撰事業の助手たるに過ぎなかつた。

然らば、何故に上皇がかく親撰の舉に出で給うたかといふことを拜察してみると、それは御治世の目出度かつたこ

とを此の集によつて後の世に傳へられむがためであつたらうと思はれる。元來、代々の勅撰集はその本旨が聖代謳歌の象徴たらしめるにあつた。新古今集の場合も、御治世を後代の國民が延喜天曆の聖代に比肩して謳歌するやうにとの配慮のもとに撰集せしめ給うたらしいことは、その序文からでも感得致し得るのである。その編纂體裁の上に、古今、後撰兩集に學ばせられた點の多いのもその御本意の一顯現であつたのであらう。つまり、此の集は、聖代の象徴であらしめたいとの御念願に出てゐるのである。従つて、此の集をよくするためには、異常なる御熱情を傾けさせ給ふのである。今日判明してゐるだけでも、元久二年から承元四年まで切繼だけに六年の長年月を費し給うてゐる。而もその後、隱岐遷幸の御後、更にその改編を思召したゞせられ、所謂隱岐御選抄を試みさせられてゐるが、それも矢張り、院の御切繼精神の一つのあらはれであつて、その御執心に感激し奉る次第である。

隱岐本御撰定の御目的は、その御跋文によれば、一に集の精撰を期したまふ御心と、二に院の御謙退の御心とより出てゐる。集の精撰を期したまふ御心は、一つは集中の劣作を除くことと、又、集の體裁の上から除く方が統一的有機的感じを保つによろしいと考へられた歌を除くこととに表はれた。また院の御謙退の御心は院御自身の御製の數を減じたまふ御心となつてあらはれた。その詳細なことは、九大國文學第一號所掲の拙稿「隱岐本新古今和歌集と久原本」といふのを看らねたい。要するに、隱岐本に於て後鳥羽院の選びすてられた歌は、愚見では、

一、本歌取りの拙い歌

二、趣向の陳腐にして常套的な歌、若しくは同趣向の歌

三、題意の充分生かされてゐない歌

四、歌調や意味の上から妥當を缺く用語の歌

五、歌調に暢達優艶美を缺く歌

六、聯想美をもたない歌

七、贈答歌の贈の歌の除かれたための返し歌

八、形式用語の華麗に流れて實感の眞實性に裏づけられてゐない歌

九、過去の勅撰集に既收の歌

の何れかに屬してゐるやうに思へるのである。隱岐本に於ては、各卷の卷頭歌は、たとへその中に御氣に召さぬ歌があつても、原の序文を生かすために、且つ原體裁を損するをおそれて、少しも御手を觸れたまうてゐないのであるが、過去の勅撰集所收歌の重出を除棄せられたのを併せ考へる時、前言の如く此の御撰抄が從來の御切繼事業の繼續であるといふことは明かである。

かやうに御考察申上げてくると、正治二年の御百首歌の御催し以來、後鳥羽院の文學的御志が専ら新古今集の編纂とその精撰とに向はせられてゐるといふことが申し上げられる。承久の役前後數年は、文獻の上では院は新古今集から遠ざからせられてゐるやうにお見受け申し上げられるのであるが、その數年間を除いて、院はその御生涯の大半を新古今集と共にせさせ給うてゐると申し上げて言ひ過ぎではないのである。

最初新古今集の編纂を思ひ立たせ給うた時は、この集のために斯く御生涯をかけさせられようとは、御親らも思召してゐなかつたであらうと拜察申し上げる。此の編纂を御畢生の御事業とし給ふ御覺悟のもとに御企劃遊ばしたのな

らば、その成功を特に取急がせ給ひ、まだ清書も完全に出来上つてゐないのに竟宴を急ぎ取行はせられるといふやうなことは無かつたであらうとわたくしには考へられるからである。蓋し、何事にでも、たとへば假初の趣味事にでも心魂を打込んで熱意ある眞剣な態度を示し、物事を徹底せしめねば止まぬといふのが、後鳥羽院の御本性であらせられるらしく、この御本性のゆゑに、一度、新古今集の撰集に従はせ給ふや、遂にこれを畢生の御事業と遊ばすに至つたのである。わたくしには、此の撰集事業を通じてだけでも、その御性格を欽仰し奉ることが出来るやうに思へるのである。

元來、後鳥羽院の和歌に對する敬慮を伺ひ得る纏まつたものとは、後鳥羽院御口傳があるのみである。その他のものには、千五百番歌合、水無瀬釣殿當座六首歌合、遠島御歌合等の御勅判、並に新古今集が幾分参考となるのであるが、千五百番歌合の御判詞は、御歌を以てし給うてゐるので、御意見の詳細なことは伺ふことが出来ない。また、水無瀬釣殿六首歌合は、藤原定家の歌と御製とを番はさせられて、それに勅判を下し給うたので、その御判詞には非常に御謙遜の御氣持があらはれてゐて、御遠慮勝ちであり、不當に御製を貶めて定家の歌を賞揚したまふ傾きがあつて、従つて此の歌合の御判詞からは上皇の御眞意を伺ひ奉るのに困難を感じるのである。だが、これらを通じて、大體どういふ歌を好ませたまひ、如何なる歌を御好みにならないかといふことだけは、お察し申上げることが出来る。また新古今集は御親撰であるから、これを以て院の御選歌傾向を推定申しあげることが可能であり、殊に切入歌や隱岐本は御好尚の程を最も具體的に示してゐるし、また、遠島御歌合は詳細に御晩年の御好尚を物語つてくれる。されば、これらの諸の資料を通じて申し上げられることは、嘗て隱岐本新古今和歌集に就いて論じた際にも述べたことであ

つたが、後鳥羽院の和歌に對する御好尚は、隱岐遷幸以前と以後とでは尠からぬ變化を來してゐるといふことである。優麗艷美の歌調をもち、清新で複雑な情趣美と甘美な感傷性とをそなへた品位ある歌を御理想と遊ばしたことは、前後一貫してゐるので、たとへば、千五百番歌合に、

いづれともみえぬまぎの月影を匂ひにぞわくきくの白露
の歌を負とし、

朝ぼらけまきのを山に霧こめてうちの川をさ舟よばふなり
を勝とし給ひ、また

谷の戸はまだ明けやらぬ霧のうちに出づる朝日は影だけにけり
を勝として、

花も露もいかに心をくだけとて秋は野分の吹きはじめけむ
を負とし給ふが如き、總じて、概念的説明歌よりも具象的情趣美に富んだ歌を佳しとしたまふ傾向がある。また、たとへば、

秋からの月の光か露ゆゑの秋のあはれかいかにながめむ
を負とし、

いかなれば霞にきえしかりがねは月の秋しも契りおきけむ
を勝とし給ひ、また

むかしみし月はあはれやまさりけむ面影にさへぬるる袖哉
を負とし、

秋風をくるるよごとに身にしめてたのめぬたれを松虫のこゑ

を勝とし給ふやうなのは、すなはち、表現趣向の清新且つ優艶な歌を好ませられた一例であり、その外、

浪のうつ玉の浦わのあら磯に光をくなくよはの月かな

といふ公繼卿の歌と

月をのみ伏見のさとの秋の暮松風ならでとふ人もなし

といふ俊成卿女の歌と、何れも具象性をそなへた歌であるが、而も俊成卿女の歌に軍配をあげられたのは、これは表現の巧みとか調べの流麗とかいふためではなくして、恐らくその歌境の哀れ深さ抒情味の豊かさに心惹かれ給うた故とわたくしは拜察する。そのやうな例は、

ながむるに傾く月ぞうらめしき我はかくこそいりもやられね

心なき身をさへさらにをしむ哉なにはわたりの秋の夕ぐれ

の二首のうち、後者を以て勝とせられたのにもまた伺ふことが出来よう。西行法師や藤原俊成の歌に豊富に見出すことの出来る、ほの甘い感傷性を後鳥羽院はすべての歌に覚えられたのである。また、調べの流麗で品位のあるといふことをまた非常に大切に遊ばしてゐたことは、前掲の勝と判じ給うた歌に調べの高い流麗な歌の多いことによつても拜察出来るわけで、かやうに、乏しき資料ながら、千五百番歌合の御勅判の中から考察し奉つただけでも、御好みの

歌が、優雅流麗の歌調をもち清新にして情趣美に富み而も感傷的抒情的な魅力をもつた歌であつたといふ結論に到着し得るのであるが、遠島御歌合を拜見しても、矢張り此の御好尚は隨處に指摘申しあげることが出来る。つまり、新古今集は、さういふ後鳥羽院好みの歌が多く集められてゐると見るべきである。しかし、前期に於ては、當代の風潮たる定家等の具象的官能的表現法をも御認容遊ばされて、その影響によつて華麗豐艶な官能美の歌をもお作りになつてをるし、また、新古今集にもさういふ歌を尠からず切入れてお出でになる。但し、さういふ歌には、兎角技巧中心の空想的歌が多くて、内容が比較的空疎である故、御晩年の上皇には、その華やかな装ひだけがお目に立つのである。遠島御歌合の御判詞によると、上皇は前代未聞の御體驗によつて、實感の歌を愛し、花やかな装ひの歌を好ませられぬやうになつてお出でになる。たとへば、遠島御歌合七十三番、

左 女 房

軒はあれて誰かみなせの宿の月過ぎにしままの色やさびしき

右 家 隆

さびしさはまだ見ぬ島の山里を思ひやるにも住むこちして

左右ともに、おもひやりたる山の家に侍るを、いまだ見ぬを思ひやらむよりは、とし久しく見ておもひ出でむは、今すこし心ざしもふかかるべければ、相構へて一番は左の勝と申すべし。

とある。左の作者に女房とあるは院の御隱名で、この御歌は水無瀬離宮での昔日の御生活を御回顧遊ばされての御製であり、右の家隆のは隱岐の御生活を偲び奉つての落涙である。後鳥羽院の御判詞は、まだ見ぬ隱岐の島住みを思ひ

やるよりは、昔住んでゐた水無瀬の宮を偲ぶ懷舊の心の方が遙かに感動が深いから、左の歌を以て勝とすると仰せられてゐるのであつて、此の御判詞を和歌一般に押しひろめて理解し奉れば、想像の歌よりも實感の歌の方が歌として強い感動を與へ得るものであるといふことを御主張遊ばしてゐると解し奉ることが出来る。そして、また、たとへば、

左 侍從隆祐

朝日影まだいでやらぬあしびきの山は霞の色ぞうつろふ

右 下野

山ひめの霞の袖も紅にひかりそへたるあさ日かげかな

の御判詞に、

左歌させる難なし。右歌かすみの袖も紅に光そへたる朝日影、あまりはなやかに聞ゆるにや。左うるはしく見ゆれば、勝とすべし。

と仰せられ、右歌の表現が花やかにすぎると非難せられてゐるが、これは院の御好みが徒らに空疎な言葉の花よりも體驗に裏づけられた質實感に満ちた歌にあつたことを證するものである。すなはち、かういふ風に、御好みが變つて來たから、たとへば、元久二年三月十三日の日吉三十首中の

ほのぼのと春こそ空にきにけらし天の香具山かすみたなびく

といふ御製を御製作當時直ちに新古今集に切入れさせられたものを、今隱岐本では除き棄てさせ給うてゐるのであ

る。つまり、實感歌を愛し、はなやかな装ひの想像歌を好ませられぬやうになつたから、自然、このやうに一旦切入れた歌をもおすて遊ばすのである。蓋し、隱岐本を擇び直されたのは、つまり、曩に御勅撰あつた新古今集の歌に飽き足りぬ點を御發見になつたからであり、そして、その御不滿の生じて來た所以は、かくの如く御選擇眼が變らせられたからであらう。

後鳥羽院は、新古今歌人中では比較的に情緒的な物あはれな風情を表現する側の代表者でいらせられ、西行風の巧まざる自然的發想と實感のこもつた詠風とに傾倒遊ばしたやうで、新古今集に西行の歌を最も多く採らせられてゐるのもその事が分るので、従つて、御晩年の上述の如き傾向は今度新たなものが生じたといふよりも昔からあつた本質的な御特長が、かの非常なる御體驗を契機としてこゝにその質量を増し來つたといふことになるのである。曩にも語つたやうに、千五百番歌合等にも、感傷的な歌を好ませ給ふ傾向はあつたのであり、かやうな好みも亦院の御本來のものであるが、隱岐遷幸後は、やはり、さういふ御傾向がまた一際濃厚にあらはれて、或は懷舊の涙をたゞへ、或は無常感とか悲愁の情とかに基礎づけられた作品を特に好ませ給うてゐる。すなはち、

左 隆 祐

かみな月くもらぬかたの空までも風に亂れてふるしぐれかな

右 下 野

忘れぬ昔は遠くなりはてゝ今年も冬ぞ時雨きにける

の兩首は何れも秀逸として勝劣分けがたいが、猶ほ、「昔は遠く」と置いた下野の氣持の方があはれであるからその方

を勝とすると遠鳥御歌合に仰せられてをり、また、同じ歌合に、

神無月時雨ばかりぞ檣の屋に昔ながらの音もかはらぬ

の歌に就いて、「させることなけれども、かはらぬ事は時雨の音ばかりとよめる、あはれなるやう也」と仰せられて此れを勝とせられてゐる。これらは、繰り返すやうだが、隠岐に於ける切實なる御體驗の結果、人生の無常を深く感得し給ひ、おのづから右のやうな作品に心惹かれ給ふのであらうと拜察申しあげられて、恐懼に堪へない次第であるが、此のやうにして、院の御好みとか御選歌眼とかにも變化が生じ、新古今の再選抄も始まつた所以である。

さて、後鳥羽院の御歌を年代順に拜見してゆくと、正治年間はまだ御習作時代でいらせられて、充分の個性を御發揮遊ばしてゐない。たとへば、正治二年九月の院御歌合の御製、

眺むればくもりもやらず風冴えて雲間の空に有明の月

が、それより數年前の六百番歌合の藤原良經の歌、

空はなほかすみもやらず風さえて雪げにくもる春の夜の月

に近似してゐるといふ風である。が、しかし段々院獨特の個性があらはれて來て、晩年には遠鳥御百首のやうな秀れた御作が生れるに至るのである。本稿の冒頭にも述べたやうに、歌をおはじめ遊ばした正治二年は、後鳥羽院御二十一歳であらせられた。二十一歳の青年で而も初心の御身でましながら、正治二年の院初度百首歌の何と清新で、優麗であることか。もちろん、當時の歌人達に比較すれば、技巧は單純で幼稚でまします。しかし、その詩想は、少しも時流に捉はれず、眞率で、自由で、而も極めておほどかな詠風であつて、御詩才の秀でさせ給ふ御天分の程が忍

ばれるのである。

昔よりいひしはこれか夕がすみかすめる空のおぼろなる月

なにとなく物あはれなるきさらぎの雨そぼふれる夕ぐれ空

春雨に軒のかけろふみえわかすくれゆく空のたどたどしさに

おもひわびねられぬものをなにとまた松ふく風の驚かすらむ

山ざとの柴の編戸にかけもりてほのかにかすむ春の夜の月

かういふ風な詠風である。縁語懸詞の技巧もなく、巧緻な本歌取りもなく、率直に叙して而も一脈の詩情をたゞへて凡ならざるものがある。總じて、百首歌の製作は一般に詩想が涸渇窮塞して苦心のあとの歴々と現はれてゐるものであるが、院の御百首歌には少しもさやうな苦心のあとが見えず、暢達そのものに拜せられる。而も御進歩のあとは著しく、同年九月の第二度の御百首には、前回の表現の稚拙さが餘程すくなくなつてゐて、技巧の御鍊達ぶりが、鐘の音にこぞの日數はつきはててはるあくるそらに驚のこゑ

梅がえのこすゑをこむる霞よりこぼれて匂ふうぐひすのこゑ

等の御歌にあらはれてきてゐる。そのうち千百番歌合、老若五十首歌合その他の御歌合歌や、内宮御百首、外宮御百首等の御百首歌が相次いで作られてゐるが、それらの中に新古今集に採録せられてゐる數多の御名歌があつたのである。當時の院の御歌は、華麗な、と言つても定家等のやうに言葉の技巧に捉はれ過ぎず、俊成風な平明な表現のうちに華麗な情趣を髣髴たらしめるところに御特色が存してゐる。大體、元久年間までは、一筋の途を辿らせ給ひ、習

作時代の延長發展と御見立てして差支へないのであるが、それ以後、承元年代からは、御歌が變つてきてゐる。その御構想の上から見奉れば、終始一貫してゐて少しの變化もないのであるが、表現の上に漸く落着きと眞實味とを示し給ひ、御獨自的な表現が生れて來たのである。千五百番御歌合歌に、

世の中にたえて嵐のなかりせば花にこゝろはのどけからまし

といふ御製があるが、かやうにその頃は平氣で何の屈託もなく先人の作品の換骨奪胎を行ひたまひ、また先人の造句を御自作の中にとり用ゐられて、誠に豁達な御氣象のほどをお示しになつてをる。

忘れては雪かと思ふ冬の夜の月すむ浦の有明の濱

かういふ御歌もある。建仁元年十月十三日の御歌である。

眺めのみしづのをだまき繰り返し昔を今の夕暮の空

といふやうな御歌もある。建仁三年十一月和歌所での御詠である。遠い昔の人の歌を本歌と遊ばされるのみではない、近頃の人の作からでも平氣で語句を借用し給ふのである。曩にあげた「ながむれば曇りもやらで空沍えて」の御歌の如きも、その一例である。そして、元久元年七月宇治御幸の時の御詠に

宇治の山雲吹き拂ふ秋風に都のたつみ月も澄みけり

といふのがあるが、このやうに、喜撰法師の「都のたつみ」の語句を借用せられても、此の場合には、しつくりと一首のうちに混和してゐない。かやうに、本歌の句が御作の中で充分の融和を遂げず、ただ御才氣だけを目立たせるのが、此の頃のお歌には非常に多いのである。華麗であり、官能的であり、才氣煥發の御歌ではあつても、心持の深さ

を表はすことに於て充分でない、さういふ御歌が多いのである。然るに、承元以後になると、本歌をとつても以前のやうに御才氣が目立たず、一首のうちに渾融した姿をもつて表はされて来る。たとへば、

あけゆけど木かげはくらきみ山路に嶺とびこゆる鳥の一こゑ

といふお歌の「嶺とびこゆる」は人麿の歌から來てゐるのであるが、此の場合は非常に効果的に用ゐられてゐて、此の一首中では動かすことの出来ない句となつてゐる。また、最勝四天王院御障子歌に「交野」を詠ぜられて、

宿かさむ人もかたののささのほにみ山もさやと霞ふるなり

とあるのは非常に技巧の克つた歌であるが、それでも、「ささのほにみ山もさや」といふ人丸の句が此處では少しも不自然でなく素直な効果をあげてゐる。かういふ風に、元久頃までの御製には乏しかつた、本歌取りの上の老熟さが爾後の御作にあらはれてゐるのである。おもふに、かういふ風に相違して來たのは、元久頃までは院は歌想を心の外部に覺めておいでになつたのが、承元頃から心の内にたづねられる傾向をお持ちに相成つたことに由來するのではないかとおもふ。元久頃までは、眞實の意味で、述懐歌と申しあげ奉るべき御製は皆無であるが、建永元年の御詠には、

何とまた古き思ひの重ぬらむくだる世をのみ歎くべき身を

なさけありし昔を今になしわびて袖の雫のしづのをだまき

といふやうな述懐歌があり、叙景の歌に於ても、

忍びこし路のべ柳秋もなほあはれ昔の風拂ふらむ

などといふのがある。有名な

奥山のおどろが下も踏み分けて道ある世ぞと人に知らせむ

との御製は、承元二年三月住吉御歌合に「寄山雜」と題する御歌であつた。此の頃から抒情述懷の御歌が著しく多くなり、建暦二年十二月の御二十首歌の如きその半數は述懷抒情の御歌となつてゐる。かくて煙金のやうな味と表現とをもつた建保四年の建保御百首が生れたのである。

遠島に於ける御詠歌は、御實感を基調として、歌材も出来るだけ御身近くに求め給ひ、眞率にして巧まざる述懷の佳作をなし給うてゐるが、さういふ御佳作を生ませらるべき素地は、すでに此の建保前後の御歌風で出来てゐたのであつた。後鳥羽院の御歌風は、總じて藤原俊成に私淑し給ひ、その歌風のとを學び給うたのであるが、(此の事は御口傳の中にも仰せられてゐる)藤原定家の達磨歌とは凡そ懸け離れた歌風であつて、定家が表現の技巧に重點をおいて、感覺的な語句の配列によつて幻影的美趣を象徵しようとするに對し、後鳥羽院はさういふ態度の歌にも佳作のあることを認められながらも、なほ、作者の感動内容を重視し給ひ、その平明優麗な表現に力を凝ぎましたのである。正治の御百首は若々しい手法を以て、自然に對する平常の御生活體驗を印象的に歌ひあげ給うてゐるのであるが、その後、一時、御歌材を體驗の外に求められ、古典を通して御歌想を纏められる御様子に拜せられたのが、再び自己體驗の世界に眼をめぐらし給ひ、今や遠島での御體驗で、御實感の忠實な表白を以て歌の理想と遊ばされるに至り、かくて、遠島御百首は、御生活の日常の御感想をありのままに印象的手法を以て表白し給うてゐる。蓋し、その本來の御素質によつて、最初の御詠作態度に戻りましたのであると申しあげるべきであらう。

遠島御歌合の中に、

遠山路いくへもかすめさらずとて遠方びとの問ふもなければ

訪はるるも嬉しくもなしこの海を渡らぬ人のなげの情は

かやうな大御歌を拜誦し奉ると、後鳥羽院が如何に強い御氣象にしましたかを身にしみて覚えるのである。そして、この遠島にあらせられて、而もかく強い張りつめたお心をおうたひになつてゐるところにその英雄的御氣慨のほどが伺はれて、却て御心中の御寂寥が痛いほど感ぜられるのである。わたくしは、後鳥羽院の御生涯を英雄の御生涯であると拜察申しあげてをる。まことに不退轉の生の姿である。その御歌歴の上だけに伺つても、新古今集の撰集事業といひ、御作歌へのご精進と言ひ、ただ不退轉の一途をのみ辿りましてゐることは、實に仰ぐも恐れ多い次第である。

後鳥羽院が俊成、西行に御傾倒遊ばされ、季經、顯昭の一派を輕視し給ひ、良經、定家、家隆等の新興歌人を近づけましたことは、その御高邁なる詩的御見識の發露である。新古今集の精撰に生涯をおかけ遊ばしたことは、その御嚴肅なる御詩的良心の顯現である。

遠島に於ける御製にも、たとへ、

思ひやれま柴のとほそおしあけてひとりながむる秋の夕暮

とまでは仰せられても、承久の敗將、藤原秀能のやうに女々しくも

ふるさとなきてなげくことづてよみちゆきぶりの春のかりがね

とは決してお歌ひにならぬ。

われこそは新島守よおきのうみのあらき波風こころして吹け

といふ歌などを拜誦すると、却つてそこに王者の御風格と御氣品とが充ち溢れてゐるのを感じるのである。而して、此の氣品は、院の御製全部を通じて申しあげ得ることであつて、その優麗なる御歌調と共に、他人のまねるを得ない最大の特色となつてゐる。

なほ、御口傳によれば、「和歌學問にして種々の難儀どもをさたし才學をわかつ事は人によるべし。よのつねには、ただ萬葉集ばかりよみたるやうを心得おくべし。」と仰せられてゐて、作歌には萬葉集を参考とすべき由を強調せられてゐるし、實際の御歌にも萬葉集を本歌にした歌が非常に多く、中には、

山櫻さきにけらしもみよし野の八重たつ雲ににほふ春風

のやうに萬葉歌調を加味した御製もあつて、萬葉に對する御造詣があらせられたやうであるから、上述の御氣品と御歌調とは、その御人柄と御詩才とによるは勿論のことであるが、萬葉集の御研究に負ひ給ふ點もあつたらうとわたくしは拜察申上げる。今、此の稿を草するに當つて御集を繰返し拜讀し、今更の如く御歌才の非凡にしましたことを欽仰し奉ることである。

院は、また、和歌のみならず、連歌の道にも御心を寄せられてゐる。それで、最後に、御連歌について一言申述べて此の筆を擱かうと思ふのであるが、明月記の記事によると後鳥羽院が連歌を作らせられたのは、建永元年八月九日鳥羽城南寺に於てが御最初のやうである。元來、連歌は周知の如く短歌の上下句を二人して唱和合作するのを言つたのであるが、鳥羽天皇の頃に三句以上連ねる鎖連歌といふのが出來、更に漢詩の連句の影響を受けて、數十句連ねる長連歌が行はれるやうになつた。かういふ長連歌はいつ頃から始まつたのか明かでないが、今日文献に辿り得るとこ

ろでは、此の後鳥羽院時代以前に遡ることが出来ない。正治二年九月二十日に定家等が賦五色連歌を百句連ねてゐる記事が明月記にあつて、これらが百句連歌の記録の最初のものであらうと思ふが、既に賦物をとつてゐることではあり、突然此時百句をはじめるといふことも考へられないから、これより以前からこれ位長くつづける連歌が行はれてゐたと考へられる。そして連歌がかういふ風に百句も続けるやうになつたには、前に述べたやうに漢詩の連句の影響があると思われるのである。玉葉の記事によれば、漢詩の連句も文治三年頃までは、普通五六韻に過ぎず多くて二十韻を越えなかつたのであるが、大日本史料所引の猪隈關白自建久九年五月十一日の記事に連句百餘韻ありとされるから、この數年間に連句も頗る長いのが流行するやうになり、連歌もその風潮に伴つて自然長いものが行はれるやうになつたと思ふのである。従つて此の正治二年より以前から五十句も百句も連ねる連歌があつたとしても、正治よりも左程古い時代ではあるまいと推定するのである。だから、大體は、後鳥羽院の御宇に百句も續く長連歌が発生したと考へて大過ない。ところで、建永元年八月九日鳥羽城南寺で行はれた連歌が頗る興味深かつたので、翌十日には更に大々的に行はせられた。これが有名な有心無心の連歌である。連歌は、今まで院御自身は遊ばしてゐなかつたけれども、院にお仕へしてゐる下々の者や或は定家等のやうな殿上人の間にも座興として行はれてゐたのであつて、今度も院の御伴をしてゐる人々の間で行はれてゐたのを院が聞し召し、これは面白さうだといふので、院も御加はり遊ばされて、改めて連歌會を張行せしめ給うたわけで、それが此の有心無心の連歌である。有心といふのは後鳥羽院をはじめ奉り和歌所の面々の組であり、無心といふのは滑稽連歌で和歌所に屬しない連中の組である。此の有心無心連歌はその後連日行はれて、結局有心方が勝利を得たが、此の連歌會の連歌史的意義は、有心連歌が無心連

歌に勝つたといふことで、つまり、有心連歌は眞面目な和歌的な連歌であり、無心といふのは狂歌風な連歌であつたのだから、有心連歌の勝利は連歌を滑稽の域から眞面目な和歌的情趣のものたらしめようと志す人々の勝利といふことになるのである。後鳥羽院は全く興味のために遊ばしたことであつたらうが、偶然にもさういふ劃期的運動の音頭取りとおなり遊ばしたことになるのである。此の意味で後鳥羽院は連歌發達史上重要な地位を占めたまうたことになる。その後、建保五年四月にも連歌を行はせ給うてゐるが、連歌は和歌ほど院の御氣に召さなかつたと見えて、それほど頻繁には行はせられてゐない。菟玖波集には御製が十八句載せられてゐる。何れも、

有明の月は薄かすみつつ

芦火たくなだのしほやの浦かぜに

朝霞春や山より立ちぬらん

雪に木傳ふ鶯のこゑ

とやうに、全く和歌趣味、和歌手法を出ないものである。(完)